

事件

「あのおくフェイトさん、これどうしまししょう？」

ティアナは自分の置かれている状況がよく分らず、少しだけ投げやりに言ったのだっ
た。

見ればティアナと一緒に床の上にぺたりと座り込んでいるフェイトらしき女の子は、全
くといっていいほど丈たけが合っていないだぶだぶの茶色い制服。

それは陸士部隊のものだが、アイロンがかかってピシツとなっていたであろう焦げ茶色
のジャケツトが女の子の腕の長さにあわず袖が途中からだらりとぶら下がってシワシワに
なっていた。

そんな女の子の顔は幼く、胸はぺったんこ、背丈は座り込んでいるからティアナからは
正確に分らないが、座高から察するにかなり縮んでいる。そして、髪はさらさらと流れる
ような金色をして後ろ手に黒いリボンで二つに結っている。髪型だけは数分前のフェイト
のそれと変わらなかった。

「うーん……どうしよっか」

女の子が言葉を発した途端、ティアナはその声の幼さに驚いた。

ティアナ自身も現状がいまいち把握できていない、たぶん隣に座り込んでいるのはフェイトだと思うのだが……というかこの貨物室に一緒にいたフェイトしか考えられないのだ。しかしフェイトの姿形が変わりすぎているために、思考能力が追いついていかない。仕方がないのでティアナは怖々、自分の腕を見つめるとフェイト同様に腕の丈が合わないゆるゆるの制服を着ていた。

「ティアナ、鏡持つてるかな？」

「はい……これでよければ」

ティアナは、かなり大きい制服の袖をまくって何とか腕を外に出すと、内ポケットから鏡を取り出して隣にいた小さなフェイトらしき女の子にわたす。

「うーん……思ったよりだいぶ子供になっちゃったね」

手渡された鏡でフェイトは、自身の姿を見るなり落ち着いた様相で感想を述べた。

「ティアナも見ろ？」

「は、はい……私もちょっとどうなっているか怖いですが……」

さつきまで自分よりも年上だったフェイトが、今はかなり年下の子供になっていた。そんな状況に思考が追いついてきたティアナは慌てふためいた。もしかしたら、自分はこのフェイトよりも小さくなっている可能性だってある。

ただ夢であって欲しいと願った。

そして、自分の顔を見ていたフェイトは鏡をティアナの方へと向けた。

そこに映っていた変わり果てた自分の姿を見るなりティアナは驚いたのだった。

「えー！ー！」

ある程度フェイトの様子と、自分の制服の袖を見た感じの縮み具合から察するに、自分も子供になっているだろうと思っただが、だいぶ若い。

若いなんてもんじゃない。

子供。こども。子供だ。

同じ子供になったフェイトと見比べてみると、どうやらフェイトよりは少し年上の顔立ちをしていたが、かなりのチビッコになっていた。

「ティアナの子供の頃も、とってもかわいいんだね」

フェイトがあっけらかんと言った。

自分たちの置かれている状況を把握している割には落ち着いている。

ティアナはこんな状況になっても落ち着いていられるフェイトさんが少しうらやましいと思った。

「あの……フェイトさんの方がだいぶお若くなっていますが……」

「うん。そうみたいだ。でもまあきつと何とかなるよ」

ティアナから見れば、声も背丈も全てが子供に見えたフェイトだったが、その言葉には、

子供にない落ち着いた大人の様子が感じられた。

フェイト・T・ハラオウンは19歳の若き執務官であり、ティアナ・ランスターは16歳の執務官を目指す2等陸士だった。

そう確かに、ほんの数分前までは…